
ジョージ浅倉の息子II

があわいこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョージ浅倉の息子IEI

【Nコード】

N7427L

【作者名】

があわいこ

【あらすじ】

ジョーがクロスカラムで壮絶な死を遂げて3年。

一人で彼の忘れ形見であるジョージユニアを育てているキョーコのもとをケンが訪れる。

そのとき、豪華客船が謎の沈没事故を起こしたとの連絡が南部博士から入る。

総裁Xの逆襲が始まったのだ。

(前書き)

拙作「ジョージ浅倉の息子」の続編です。

初めての方は先に「ジョージ浅倉の息子」を読んでください。

<http://ncode.syosetu.com/n3181>

i /

「ジョー、危ないわ。こっちへ戻りなさい。」
二歳くらいの小さな子供が、道に飛び出してきた。
母親なのか？まだ若そうな女性が、その後を追ってくる。

「やあ、キョーコ。元気そうだな。」

「あらケン。パパのおつかい、ごくろうさま。」

キョーコは、小さなわが子を抱き上げると『国際科学技術庁・職員寮』とかかれたエントランスをくぐって、ケンを自室へ案内した。

「博士から預かって来たよ。」と言ってチエツク柄の手提げ紙袋からケンが出したのは子ども用の小さなハンチングハットだった。

「これだわ。よく取ってあったわね。ありがとうと博士に伝えてね。」

古ぼけたブルーの帽子を抱きしめるキョーコをケンは不思議そうに見つめていた。

「それ、誰の帽子？ジョー…ジョー・ジュニアにはまだちょっと大きいみたいだし。」

「これ？これはジョーが被っていたの。BC島から脱出するときにね。」

「へえ。」

ふいにキョーコのエメラルド色の瞳から大粒の涙があふれた。

「クロスカラコルムへ行かせるんじゃないかった…。」

「キョーちゃん？…。」

「ダメねえ。もう後悔はしないって決めていたんだけど。」

帽子を再び紙袋にしまい、涙をぬぐうとキョーコはポットカバーを

外して紅茶をカップに注いだ。

「あの日、空港でジョーに会ったの。今までに見たこともないようなものすごく強くて美しいオーラに包まれていてそれはそれはカッコ良かったわ。ギャラクターへの復讐心ではなくて自分がなぜこの世に生れて来たのかを悟った輝きに満ちていたの。あの姿を見たら、ジョーの想いに反対することなんてできなかつたわ。」
そう言うとキョーコはケンにシュークリームを勧めて紅茶を一口飲んだ。

「オレの好物、覚えていてくれたんだね。」

「ええ。もちろんよ、ケン。」

キョーコに笑顔が戻った。

その時、それまで大人しく絵本を見ていたジョー・ジュニアが突然、「ママ、ママ。パパ、パパ。」と言いながら紙袋を開けようとした。キョーコは母親の顔になると、

「ジョーくうーん、それは私のパパの南部博士からのおみやでちゅよ。ジュニアのパパは…」

そう言いかけてはつとした。

(ジュニア。あなた、まさか…?)

「どうかしたか？」

「ううん。」

キョーコは隣りのチャイルドチェアにジュニアを座らせると、「ア〜ン」といって自分のシュークリームを頬張らせた。

「キョーちゃん、南部博士なんだけど…」

「なあに？」

「せっかく平和になったのに、まだオレたち忍者隊を解散させるつもりはないらしいんだぜ。それどころか大がかりな海底移動基地を建設してるし。」

「それは…。それは万が一に備えているのよ。」

「だけでもうあれから3年がたつぜ。」

ケンはずカスカラコルムの冷たい草の上で別れた男のことを思い出していた。

「早いものね。この子が生まれてもう2年が過ぎたわ。…博士は、総裁Xが再び地球を狙って戻ってくるかもしれないって考えているようよ。」

「総裁Xか…」

ケンがそうつぶやいた時、彼のブレスレットが鳴った。

「はい。ケンです。」

南部博士からだった。

「豪華客船がナゾの沈没事故を起こしたらしい。すぐに調査開始だ。」

「わかりました。博士。」

ケンはブレスレットのスイッチを切るとキョーコに澄んだ青い瞳を向けた。

「まさか、総裁Xじゃないよな。」

「さすがはガツチャマン、するどいわね。」

だがその言葉をキョーコは呑み込んだ。

確信がなかったし、そんなことになった欲しくは無かったからだ。

ケンは風のようにキョーコのもとを去って行った。

確信と言えばキョーコにはまだジョーが死んだことが信じられなかった。

傷ついたジョーを背の高い男性が抱いてどこかへ運ぶ姿が頭から離れない。

でもそれは、あのBC島での出来事のはずだ。

「ジョーと別れてから、いいえ、この子を産んでから私のチカラは

弱くなったものだわ。」

キョーコは相変わらず脳科学研究所に勤めていたが、ジュニアを身籠ってからというものの危険なSVR波の照射実験はしていなかった。出産後、彼女は自分の能力が衰えているのに気付いたが、敢えてそのまま自然に任せることにした。

-. - 見えないものは見えない方がよい-. -.
普通の暮らしが一番良いと知っていたからだ。

それから何ヶ月か過ぎたある日の夜、いつものようにジョーの古いハンチング帽を枕元に置いて眠りに就いたキョーコは不思議な夢を見た。

キラキラと照りつける太陽と砂漠..。

そこにあの男は立っていた。

「ジョー、ジョーなの？」

その姿は太陽の反射で良く見えなかった。

はっと目が覚めるとそこにジョー・ジュニアが立っていた。

「ジョー..。そうね、あなたを呼んでしまったわね。」

キョーコはジュニアを抱き上げるとやわらかいほほにチュッとキスをした。

横目でキョーコを見つめるジュニアの瞳はジョーそのものだった。

「ジョー..!!」

キョーコは思わずジュニアを強く抱きしめた。

だが、フツとジュニアの姿が消えてしまったのだ。

キョーコはハツとした。

こ、これも夢..!!..!!

「ジョー！」

今度は本当に目が覚めた。

玄関のドアが開いていた。

眠っていたはずのジュニアは自分の小さなベッドの上にはいなかった。

「ジョー……ッ！」

総裁Xの人間改造機によってカプセルの中で急成長したサミー、いやゲルサドラは総裁Xの前にかしこまっていた。

「総裁さま。お呼びでしょうか？」

「ゲルサドラよ、よく聞け。先のカツツエの時に、超能力者の女を一人殺りそこねたのは知っているな。」

「はい。総裁さま。愚か者のカツツエは小さな女一人を見つけだすこともできずに……。」

「その女はギャラクターにとって邪魔な存在だ。世界中から科学者や軍事武官を拉致し始めればいずれしゃしゃり出てくるであろうガツチャマンや南部がうるさくなる前に始末してしまうのだ。ゲルサドラ、オマエなら見つけられるな。」

「はい。その女のESP脳波パターンはとっくに分析済みでございます。もう時間の問題かと。」

だがギャラクターのESP脳波パターン解読装置にかかったのは小さな男の子だった。

理由はわからないが、とにかくその子を拉致して調べてみれば何かわかるに違いないとさっそく偽のテレパシーを送り、畏にかけたの

だった。

ゲルサドラは再び総裁Xに報告した。

「総裁Xさま。拉致して来た男の子のDNAを調べましたところ、興味深い結果が出ました。あの子の母親は99.9%の確率でキャララインでございます。」

「ほほう。」

「そして…。」

「そして、どうした？」

「はい。その父親は。」

「父親は？」

「95パーセントの確率で科学忍者隊のコンドルのジョーだという結果が出ました。クロスカラコルムで薬を注射した時に取っていたデータが残っていましたので先ほど照合させました。」

「たわけたことを申すでない。コンドルのジョーは死んだはずだ。」

「はい、しかし死ぬ前に忘れ形見を残した可能性はあります。」

「ええい。ならば確かめる方法が一つある。コンドルのジョーが使っていた羽根手裏剣と同じものを作るのだ。」

「羽根手裏剣?!とな。」

「ふふふっ。上手くいけば、キャララインだけでなく忍者隊や南部もこの世から抹殺できるぞ。」

「なんと、なんと南部や忍者隊までも…?」

「そうだ。その子を始末したら、首にその羽根手裏剣をグサリと…。」

「ひえ〜っ。」

「驚いている暇があったらさっさと片付けてしまふのだ。ゲルサドラよ、やれるな?」

「ははっ。」

ゲルサドラは総裁Xが示したデータをもとに羽根手裏剣を作るとそ

れを手に取り、かざして見た。

「はっ？なんとなんと、キャロラインの行方を捜していて科学忍者隊だったコンドルのジョーの息子が見つかるとは。キキカイカイ、リンネテンシヨウ、チミモウリヨウ、…フォク、ホッ、ホッ、ホッ。」

ゲルサドラは独りほくそ笑んだ。

「おろか、おろか。これで間違いなくこの子を殺したのはコンドルのジョーだと思うに違いない。フ、ファ、ハハハ！超能力が何か知らないが、このゲルサドラにかなうものなどいないのだ！」
そして命令を下した。

「この子を使つてキャロラインをおびき寄せるのだ。死んだはずのコンドルのジョーとやらにもご出演願つてな。ふおく、ほっ、ほっ、ほっ。面白くなつてきたぞ。」

キョーコ……本名キャロライン・コスターの両親は北の国スケツタランダの出身でBC島でパン屋をしていた。

天然酵母菌を使った独特の製法と味がジェラードにも合うと評判を呼び島中から注文を受けて繁盛していた。

しかしこの二人にはある特殊な能力があった。

それはスケツタランダ地方の一族に特有のもので昔から「神の声を聞くもの」と言われてきた。

コスター一家も代々「死者と話をする」というシャーマンだった。長い歴史の中で世界中に散らばり、他の民族と同化することによってその能力も次第に失われていったが、時々先祖に還つたように強力な能力をもつて生れてくる者もいる。

キョーコもその一人だった。

そこでキョーコの両親、ベンジャミン・コスターとセーラ・コスタ

「は娘になるべく普通の生活をさせようと閉鎖的な北国から明るく開放的なこのBC島へ移民して来たのだった。

もちろんマフィアに関しての情報も知らないわけではなかった。だが、BC島はそれよりももっと恐ろしい悪魔が棲む島になっていた。

表向きは以前からこの島にいるマフィアと変わらないが何かもつと恐ろしいことを企てているように「感じた」コスター夫妻はパンの配達をしながらこっそりとその内情を「読みとろう」としていた。

ところがたまたまギャラクターが実験をしいたESP脳波パターン解読装置が反応したのだ。

「近くにエスパーがいる。注意しないとギャラクターの秘密が漏れてしまうぞ。脳波をたどって見つけ次第抹殺しろ。」

カツエの命令にギャラクターはコスター夫妻を割り出した。

「私たちはダメかもしれない。が、せめて、子供だけでも助ける方法は無いものか？」

その夜、そう考えている二組の夫婦がBC島にいた。

コスター夫妻とアサクラ夫妻である。

ジュゼツペ・アサクラは親がイタリア人ということとは分かっているが、ほんの赤ん坊だったときに教会の前に捨てられていた孤児だった。

本名もわからぬまま孤児院で育つうちにBC島の女性と結婚した日本人の浅倉譲二と知り合い、やがて養子となった。

その後、ジュゼツペは浅倉夫妻とともに日本へ「帰る」と科学者を目指して勉強を始めたが、譲二と養母ロザナが相次いで亡くなってしまう、失意のどん底で故郷BC島へ戻った。

そこで島の新興勢力ながら科学者を優遇してくれる組織があると聞いて島で再会した幼なじみで同じく孤児院育ちのカテリーナとともにその一員に加わることにした。やがて二人のあいだには一人息子が生まれた。

それから4〜5年たったころだろうか、ジュゼツペはホントワールドでスパイ活動をしていた一人の男と出会い、関係を結ぶ。そんな中、ジュゼツペ自身も二重スパイとなり組織を裏切って情報を漏らした。

自分のいる組織は間違っていると気づいたからである。

すでにジュゼツペは幹部と呼ばれ部下も多数抱えていた。自分が命令すればむごたらしい殺戮も簡単なことだろう。後戻りはできないかも知れない。

しかし、養父浅倉と同じ名前をつけた息子だけは両親の本当の姿に気づく前に何としてもこの組織から抜け出させたい。

超能力人間を探し出すことに気をとられている、今しか抜け出すチャンスはないだろう。

スパイの男が言っていたISOの関係者という人物を何とかここBC島へ誘導することができた。だが、これがもう限界だ。

ジュゼツペは護身用の銃をジャケットの胸ポケットに忍ばせた。

次の日の朝早く、ベンジャミンは最後のパンを焼きいつも通りに配達を終え、家に戻るとセーラとともにキャララインをどこへ隠そうかと考えていた。

が、不意にどこからともなくギャラクターのブラックバードが押し入ってきた。

こうなったらもう自分たちの身体で隠すしかない。

二人はキャララインの上に覆いかぶさるようにしてブラックバード

の銃弾を浴び絶命した。

仮死状態のキャロラインの脳波は読まれることはなく、彼女はそのまま幽体離脱して神父を呼んだ。

ギラクターの本部にいるカツツエは少しいらだっていた。

「キャロライン・コスターの行方は突き止められたのかね？」

側近の部下が応える。

「はっ。ギラクターの秘密を知る両親の息の根は止めてやりましたが、娘の行方はつかめなかったようです。」

「バカモノ。もっとよく探せ。」

「ESP脳波パターン解読装置が反応しなくなったということですので、もう死んでいると思われませんが…。」

「口答えをするな。裏切り者のジュゼツペ一家はどうなった？」

「はい。そちらはダブルスターがバラ爆弾での暗殺に成功したとのことです。」

「そうかそうか。これで邪魔者はいなくなったな。はははっ。」

その後、多くの犠牲を出しながらも忍者隊の活躍で地球は救われた。

…だが、しかし…。

突然、響子から南部博士のところへ電話があった。

「パパッ。ジョーが…、ジュニアがいないの。」

「落ち着くんだ。キョーコ。君ならどこにいるかわかるだろう？」

「いいえ。ダメなの。あの子が生まれてから、見えないの。ダメなのよ…私。」

「キョーコ……」

「ケンは何？」

「ああ。諸君は皆、イーストン島へ向かった。」

「うっ……」

「どうした？キョーコ！」

「……………」

南部博士は、急いで車を出させた。

職員寮の自室でキョーコは倒れていた。

「おい、キョーコ！しつかりするんだ。」

「パパ……。ジヨージョーが……。ジュニアが……」

「ジュニアはどこにいるんだ？キョーコ！」

「テルモ岬に……」

そう言うのが精いっぱいだった。

無理してありつたけの能力を振り絞ったのだろう、キョーコは南部博士の腕の中に崩れ落ちた。

博士はキョーコをISOの付属病院へ運ぶと、今度はテルモ岬へと向かった。

岬の海岸には人だかりができていた。

そこには小さな男の子が横たわっていた。

すでに地元の警察が来ていて規制線が張られていた。

IDカードを示してその中へ入ると倒れているその子の顔を覗き込んだ。

その見覚えのある男の子の姿を見て、博士はこれまでに経験したことのない怒りと悲しみの感情が身体中に駆け巡るのを覚えた。

すでにこと切れているその子の細く小さな首には羽根が一本突き刺さっていたのだ。

なんとということだ。

一体だれがこんな残酷なことを。

この子の父親がジョーと知っているような…。やはり、ギャラクタ
ー！？

変わり果てた姿のジョージュニアに直面した博士は遺体をISSOで
引き取ることにした。

「責任はすべて私とする。この子をすぐにISSOの付属病院へ運び、
司法解剖する。あとの事務処理をよろしく。」

キョーコはもうわかつているだろうか。

そか！どう説明すればよいものか。

南部博士は病院へ向かう車中でこれまでのことを思い出していた。

キョーコのESP脳波パターンはすでにギャラクターの知るところ
となっていたに違いない。

小さな頃は病院にいたので察知されなかったのだろう。

あの頃、一度理由を尋ねた時には、『三人の子持ちじゃ、パパが大
変だと思って…』と笑っていたが…。

あの子はそれで自ら病院暮らしを選んだのかもしれない。

成長してからは自分で調整していたのだろうか。

ジョージュニアを身籠つてから危険なSVR波を浴びることも避け
てきた。出産後も母性本能が勝まひつたのか彼女の超能力は影をひそめ
ていた。

ところがジュニアが彼女のESP脳波パターンを受け継いでいたの
だ。

そしてギャラクターの罠にまんまとはまってしまった。

「私がかつだった。総裁Xの再来リベンジを予測して忍者隊を解散させず

においたのはよかったがキョーコのことまで考えが及ばなかった。許してくれ。ジュニア…、キョーコ。」

しかしどうしてジョーの羽根手裏剣をわざわざ…？

そうか。父親が誰なのか調べたのだな。

ギャラクターめ…ひどいことをする。

検死をするために南部博士はジュニアの遺体をISSOの付属病院に運び入れたが、しばらくジュニアの前から立ち去れずにいた。

そのとき、確かに施錠したはずの検死解剖室のドアが音もなくスーッと開いた。

博士が顔を上げるとそこにキョーコが立っていた。

「キ、キョーコ…。」

キョーコは無言で無表情のままジュニアが横たわっているその硬くて冷たいベッドの傍らに立ち、ふっくらとした、だが青白く冷たくなったその頬に触れた。

そしてその首に突き立てられている残酷な羽根手裏剣に手をやった。その瞬間、キョーコの身体が電気ショックに見舞われたかのようにビクンビクンと2度大きく震えた。

「あーっ。あ、あ、あっ。ジョーッ！ジョーッ！」

母親としての情愛とエスパーの能力がキョーコの頭の中で激しく交錯した。

キョーコはジョージジュニアの変わり果てた姿に触れると半狂乱となりその能力で自分自身を破壊しかねなかった。

ジュニアを産んで育てている間は影をひそめていたキョーコの「チカラ」が彼の死によって皮肉にも甦ったのだ。

南部博士はジュニアの遺体に取りすがり異常な力で抱きかかえるキ

キョーコを力いっぱい引き離すと安定剤を注射してキョーコを眠らせようとした。

「キョーコ、落ち着くのだ。よく見なさい。ジョー・ジュニアは羽根手裏剣で死んだのではない！すでに殺されてからわざわざ首に羽根手裏剣を…。」

「いやー！ーっ！ー！」

キョーコが叫ぶと博士は壁際まで吹き飛ばされた。

「キョーコ、わかってはいるはずだ。ジュニアを殺したのはジョーではない。冷静になってちゃんと考えるのだ。これではギャラクターの思いつぼだ。」

「ジョー…。」

薬が効いてきたのか、キョーコはその場に力なく倒れこんでしまった。

検死を終えた博士は霊安室の隣りにある控室で仮眠をとっていた。

「ジュニアにはかわいそうなことをした。あんなにかわいい盛りだったのに。」

「ボク、何とも思っていないよ、グランパ。」

「誰だ？」

「ジョーだよ、おじいちゃま。」

「ジョー…ジュニアか？」

「ボクはパパジョーの生きてきた証しに生まれてきたの。パパが生き返って来たのだから僕がいなくなっても悲しまないで。」

「何だつて？ジュニア。ジョーは生きているのか？」

「うん。だつてここにはいないもの。」

「ここ？」

「そつだよ、ここだよ。」

はっと南部博士は目が覚めた。

私としたことが非科学的な夢に涙するとは…。

同じ頃、病室に寝かされていたキョーコも夢を見ていた。

「ジュニアはこちらで私とともに楽しく暮らしているよ。安心なさい。君はまだそちらでやる必要があるはずだ。南部博士によろしく。」

姿は見えなかったが、声はあの懐かしいジョーの声だった。

「ジョー？あの羽根手裏剣は？」

「あれはギャラクターのワナさ。君を陥れるためのね。」

その声にキョーコの目からはとどめなく涙があふれた。

「泣かないで、ママ。パパがいるじゃないか。」

ジョージュニアの声にキョーコははっと目が覚めた。

ふとそこにジョーの姿があったように感じた。

（ジョー？変ねえ。生きているならなぜ…。それにジュニアといったジョーにそっくりのあの人は…？）

そこまで考えて、キョーコは気がついた。

「ジュゼツペさん！ジュゼツペ・アサクラがジュニアを天国へ導いてくれて、今も一緒にいるのだから。」

その時病室のドアをノックして南部博士が入ってきた。

「健たちが無事に帰ってきたよ…。」

博士はベッドの横にあった椅子に腰かけて続けた。

「すまなかつた、キョーコ。ジョーの代わりに探すことに夢中になつていて君もギャラクターに狙われている身だということに…。」

もう少し注意を払うべきだった。だが今またゲッツの代わりに探さなくては…。」

「パパ……」

「……ん？どうした、キョーコ。」

そう言つてキョーコの顔を見た博士はギョツとした。

キョーコの美しいエメラルド色の瞳が金色に輝き三白眼となつてギロリと博士を見つめていたのだ。

それはキョーコに「チカラ」が完全に戻ったことを意味していた。

「ジョーは……ジョーは生きて……いるか……もしれない……」

「キョーコ、ジョーは死んだのだ。ジョーの代わりを探して……。」

「ダ・メよ、パパ。……ジョー……でな……ければ……乗……りこな……せ……ない……マシ……ン……を……作……つ……て……。」

キョーコは久しぶりに戻つた自分の「チカラ」のコントロールができていないようだった。

病室に置いてあるコップやタオル、テレビまでもが浮き上がつてしまっている。

「わた……しが……ジョ……ー……を……ひ……こ……う……き……に……の……せ……た……し……ぬ……と……わ……か……つ……て……い……た……の……に……ジ……ュ……ニ……ア……は……わ……た……し……の……み……が……わ……り……にな……つ……て……し……ん……だ……ガ……ガ……ゴ……ゲ……グ……グ……」

キョーコは自分で自分の首を絞めた。

「い、いかん。誰か、急いで安定剤を……！」

博士がナースコールを押すと、スタンドの電球がポントツと砕けた。

「ジ……ョ……ー……は……帰……つ……て……来……る……わ……。」

頑強な看護師二人に押さえつけられて安定剤をうたれたキョーコはそう言つとやつと眠った。

南部博士はすぐさまキョーコを冷凍睡眠装置に入れると外部との接触をすべて遮断した。

（キョーコ。ジュニアのカタキはきつとガツチャマンたちがとつてくれる。ここですばらく眠っているのだ。）

「ジョーがどんな姿になって還ってきてても愛していると伝えてください。」

博士の頭の中にだけキョーコの声が響いた。

（おわり）

(後書き)

読んでいただいております。ありがとうございます。

ガツチャマンのファンフィクは他にもありますのでよかったです。読んでください。

ムーンライトの方にもあります。

興味がある方はどうぞ。作家名は同じく「があわいこ」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7427/>

ジョージ浅倉の息子II

2010年10月9日17時26分発行